

支 部 通 信

日本山岳会山梨支部 第3期第18号
令和7年6月30日

令和7年度定時総会を開催

日本山岳会山梨支部の令和7年度の定時総会が、4月19日(土)に山梨県立図書館にて開催された。今年の総会には28名の会員が出席し、委任状を提出した33名と合わせて61名となり、正会員65名の過半数に達したため、支部規約の定めるところにより総会は成立した。(準会員5名出席)

磯野副支部長の開会の言葉に続き、令和7年1月逝去された故中尾正武会員への黙祷が行われた。古屋支部長の「昨年支部長に就任してから大過なく1年が経過した。今年も『みんなの山岳会』について考え行動していきたい」との所信を踏まえた挨拶の後、議事に入った。まず、1号議案令和6年度事業報告、第2号議案収支決算報告、監査報告が承認。続いて、令和7年度事業計画、収支予算が原案どおり承認され、議事は終了した。

その後、報告事項に入り、令和6年度本部・支部事業活動実績並びに令和7年度支部事業予定の報告があった。古屋支部長から、今年度は「山岳古道調査」南アルプス北部山岳古道5本、富士講の道1本、金峰山・御嶽道2本の調査報告を最優先事業として、11月までに行う予定であるとの説明と協力依頼がなされた。その他の項目として、日山協山岳共済会についての説明および規約・規程、会員名簿の取り扱いに関する説明がなされた。

総会終了後、恒例の懇親会を甲府駅ビル「麵道富士山」で開催し、交流を深めた。(相川 修)

日本山岳会創立120周年 記念事業

「全国山岳古道調査」進捗報告・予定

I 南アルプス北部山岳古道

1 西山温泉・奈良田温泉への湯道

(1) 足馴峠越え: 寺尾～矢川～小室～出頂の茶屋～大峠～足馴峠～洗城沢～下湯島

5/28 渡辺・池田・上田、6/7 古屋・磯野・石

(2) 西山峠越え: 青柳～平林～池の茶屋～西山峠～奈良田～奈良田峠 7/12 踏査予定

2 伊那街道への道

(1) 十谷峠越え: 箱原～十谷～十谷峠～新倉 6/16・6/22 踏査予定

(2) 伝付峠越え: 新倉～伝付峠～二軒小屋 8/10～11 再調査・踏査予定

3 白根三山への道

荒川本谷: 鷲住山～荒川本谷～尾無尾根～農鳥小屋～間ノ岳～北岳～広河原(又は農鳥小屋～農鳥岳～大門沢～奈良田) 8/2～3 及び 8/23～24 踏査予定

II 富士講の道(富士山吉田口登山道)

1 北口本宮浅間神社～中の茶屋～馬返

6/1 平松・遠藤・岩間 実施済み

2 馬返～五合目佐藤小屋～六合目

6/1 古屋・石澤 実施済み

3 六合目～富士山頂 9/20・28 踏査予定

(古屋寿隆)

III 金峰山古道の進捗状況

金峰山古道の調査班は、調査資料を基に誰でも歩けるルートを基本に2ルートを選定して調査している。本部から塚原ルートと杣口ルートを行って欲しいとの要請だったが、塚原ルートは起点に駐車場が無く、またメインのルートではないことから、本部の古道担当者に了解をいただきメインの上道ルートと杣口ルートの二つを行う事にした。

GPSでの軌跡を残すため担当全員でまず上道ルートを仕上げ、次に杣口ルートを仕上げようという事になった。6月1日に甲斐市敷島のクラインガルテン駐車場を起点として、4名で上道に登り昇仙峡RW山頂経由で金桜神社までを調査した。

今回はそこから猫坂経由で黒平まで、次に黒平から御室小屋跡まで。その後杣口ルートに取り掛かって御室小屋跡までをトレースし、最後に全員で山頂に到達するという予定である。7月中に踏査は完了したい。(小宮山千彰)

「引き継がれる山岳祭」

支部事業の現状把握の一環として、支部事業委員会がアンケート調査を実施した結果、各支部が関係する山岳祭と支部の宿泊施設設置の2つにつき、120周年記念事業に向けて、検討する方向が確認された。これに伴い、山岳祭についての事前調査要請があり、山梨支部として「木暮祭」「田部祭」および「深田祭」について、今までの経緯、現状などを回答をした。

「引き継がれる山岳祭」の第1回委員会は、2022年9月30日にオンライン会議によって開催された。全国12の山岳祭について「引き継がれる山岳祭」という名称が承認され、JAC創立120周年記念事業の一つとして今後行う具体的内容について検討をして行くことになった。「引き継がれる山岳祭」のプロジェクトチームの構成は本部5名の委員と、関連する群馬、越後、富山、石川、福井、山梨、信濃、神奈川、関西、四国、北九州、宮崎の12支部。このメンバーが連携して山岳祭を盛り上げる企画を検討開始することが決まった。(何故か群馬支部が当初から構成員であった。)

当初12の山岳祭でスタートしたが、その後岡野金次郎碑前祭(2024年、神奈川支部)、木暮理太郎翁を偲ぶ会(2025年、群馬支部)を追加した。現在楨有恒を偲ぶ会(宮城支部)の追加が検討されている。

14の山岳祭の内、ウエストーン祭と小島烏水祭は本部主催(ウエストーン祭は信濃支部が主管、小島烏水祭は四国支部主管)、他の12の山岳祭(深田祭、久弥祭、田部祭、岡野金次郎碑前祭、泰澄祭、播隆祭、高頭祭、藤木祭、楨有恒碑前祭、木暮祭、宮崎ウエストーン祭)は当該支部が主催、共済、後援等夫々形態は様々であるが、あくまでも人物顕彰としての山岳祭に焦点を当てていくことが確認された。なお、人物



顕彰に限らなければ、これら以外にもJAC支部が参加関係するいくつかの山岳イベントはある。

プロジェクトチームはほぼ2か月に1回の割合で委員会を開催し、去る2025年5月26日には第15回の委員会を開催した。プロジェクト開始以降検討し、実施した事項は次の2つである。(1)山岳祭のパンフレットを作成発行し(2024年版及び2025年版)、関係機関や山岳祭来場者などに配布。(2)各山岳祭のオリジナル記念切手シート(110円切手10枚)を発行して有償配付。

現在取組作業中の「山岳祭冊子」(150ページ程度、概算価格1500円)は今年度の年次晩餐会(1

2月6日)までに出版する予定。この冊子はJAC会員向けに有償配布することが前提。会員外の者から希望があれば頒布するが、書店の店頭で販売することはしない。その他、山岳祭オリジナル切手(110円と85円の2枚組、概算価格500円)も年次晩餐会に間に合わせて発行する(有償配付を予定)。

「引き継がれる山岳祭」のプロジェクトチームは2026年3月末をもって解散する。その後については「支部事業委員会」に引き継いでもらうのが良いと考えられている。(北原孝浩)

2025年度レインジャー活動計画

例年どおり山梨県希少野生動植物種の保護に関する条例により、特定種・絶滅危惧種等の高山植物の植生調査のためのレインジャー活動を下記のとおり実施する。

登録者：古屋寿隆・小宮山千彰・池田新二郎・白田昌美・河野芳尚・平松清子・上田謙治・遠藤辰也・相川修・石澤貴子・手崎喜美子・日向直子・中田雅弘 以上13名

4月10日・15日 事前学習会

4月29日 西沢溪谷(日帰り・探索調査)対象種：クモイコザクラ、ヒメスギランほか

5月12日 八ヶ岳地獄谷(日帰り・定経路①)対象種：クモイコザクラほか

6月15日 三ツ峠(日帰り・探索調査)対象種：アツモリソウ、カモメランほか

6月26・27日 鳳凰山(1泊2日・定経路②)対象種：カモメラン、イチヨウランほか

7月27・28日 北岳(1泊2日・定経路②)対象種：タカネマンテマ、ミヤマハナシノブほか (古屋寿隆)

山行報告

【雪山入門ステップアップ講習第3回】

■山行日：令和7年3月22日(土)・23日(日)

■地 図：昭文社5万図「八ヶ岳」

■行程(予定)：茅野駅—桜平—夏沢鉱泉—根石岳—東天狗岳—根石山荘(泊)
夏沢峠—硫黄岳—夏沢峠—夏沢鉱泉—桜平—茅野駅(実際は本文に記述)

■参加者：小宮山千彰、北原孝浩、相川修、向山紀子、黒沼英美、高橋みゆき、鶴田陽子、福田千絵、大西絵里奈、八木秀子

今冬も雪山入門ステップアップ講習の最終回

は、根石岳山荘に宿泊して東天狗岳・硫黄岳を目指すコースである。私は3回目の参加。1回目は突風で一瞬にしてゴーグルとグローブが凍り付いた。2回目は風速35m超の爆風で体が浮き上がった。さて今回はいかに？

夏沢鉱泉からの樹林帯、そよそよと風が吹いている。箕冠山で装備を確認し、いざ出陣。そこは荒野。強風で雪がすべて吹き飛ばされ、赤茶色の地肌が露わだ。目の前の根石岳、東西の天狗岳、風の通り道にへばりつく山荘。氷や砂の粒に体を叩かれる。爆風の中、根石岳山頂を目指す。ストックで体を支えて踏ん張る。身を低くして耐風姿勢を保つ。風の間隙をぬって少しずつ進む。風の唸りで人の声はかき消され、私は風の呼吸を聞くことに全集中した。息を吸い、息を吐く。呼吸を合わせていくうちに、いつしか私の意図と地球の意図が一つになる。このまま地球の果てまで進んでいきたい。なぜ人は山に登るのか？ 山と己の意図が一つになった時に、人は高みをめざすのだろう。



あまりの強風のため山荘に直行する。温かい部屋、美味しい食事とお酒、楽に呼吸をして会話できる空間の何とありがたいことだろう。ゆっくり仲間と歓談する。夜が更けて空に星々が瞬いても、一晚中風の唸り声の絶えることはなかった。

翌朝は相変わらずの耐風姿勢を強いられながら、何とか山頂に到着。このまま東天狗の急斜面を目指すのは危険と判断、硫黄岳登頂を検討するが、強風のため途中で引き返すパーティーが続出、我々も登頂を断念して下山することとなる。甲府の里に吹き下ろす八ヶ岳おろしは、まさにここ根石岳を超えた強風なのだという。

今回は八ヶ岳おろしと一体化する、という素晴らしい経験をすることができた。リーダーと仲間たちに感謝。次回は東天狗まで進んでみたい。ありがとうございました。（高橋みゆき）

【富士山雪上訓練】

- 山行日：令和7年4月12日（土）・13日（日）
 - 地 図：2万5千図「富士山」
 - 行 程：1日目：吉田口登山道中の茶屋集合＝馬返～五合目で訓練～佐藤小屋（泊）
2日目：五・六合目で訓練～馬返＝中の茶屋解散
 - 参加者：古屋寿隆、小宮山稔、猪俣健之介、服部俊樹、相川修、向山紀子、石澤貴子、福田千絵（支部員外）
- 当初3月中旬に予定していたが、荒天予報のため

1か月送らせて実施した。今回も降雨予報のため訓練内容を選択、グループ分けし、初心者は猪俣会員、経験者は小宮山会員が担当した。

1日目は、まずは、雪上歩行の基本のツボ足から。フラットフィッティング、目線、加重のかけ方、直登直降、斜登斜降、方向転換、トラバースの後、キックステップの練習。次に、アイゼンの装着、ピッケルの持ち方を学び、基本の歩き方のほか、ダックウオーク、ダイアゴナル、スリーオクロック、フロントポインティング、ダガーポジションを練習した。

小屋に戻り、夕食まで1時間ほどレジメによって復習と予習、ロープの結び方に充てた。

2日目は、少雨小雪予報のため、先ず六合目まで登り、そこから斜面を下りながら、滑落防止・停止の練習。最初はバケツの掘り方、耐風姿勢の取り方から。次は転ばない歩きが基本であるが、転んだときは初期制動が大事であること、滑り出してしまったら制動確保で瞬時に停止する練習を繰り返した。その後ロープを使い、ピッケル・スノーピケットなどでアンカーを作り、シッティングビレイ、スタンディングアックスビレイでの確保とスタカ



ット登行、締めはスノーボラードを作り、下降の練習をして雪上訓練を終了した。（古屋寿隆）

【三ツ岩岳】

- 山行日：令和7年4月12日（土）
- 地 図：2万5千図「十国峠」
- 行 程：竜王里宮登山口～竜王大権現一山頂
一竜王大権現一竜王里宮登山口
- 参加者：東条真百合、小宮山千影、北原孝浩、大澤純二、大澤さな枝、高橋みゆき、白田昌美、渡辺和美、鶴田陽子

南牧川の支流大仁田川の奥に、大仁田ダムを挟んで二つの岩峰が対峙している。北西側が三ツ岩岳、南東側が烏帽子岳である。今回は北西側の三ツ岩の山頂を目指す。

県営駐車場に6時30分に集合。天気予報は、晴れであるが曇りで肌寒いでも高速に入るところには、日が出てきて暖かくなってきた。

登山口の駐車場に9時ごろ到着。駐車場は満車に近く、大型バスも留まっていた。大仁田ダム近くの竜王里宮登山口から登山を開始。10分ほどで分岐となり、道は二手に分れる。右側の竜王大権現コースに行く。杉林をつづら折りに登っていく。40分程で竜王大権現に着く。ここで休憩をとる。そこには大きな岩があり祠が祀ってあった。

尾根歩きが続き、ロープが2か所設置してある。

ところどころにポツンポツンとアカヤシオが咲いていた。あと10日もすれば、満開になるだろう。下って登って山頂到着。ここにもアカヤシオの花がいくつか咲いていた。山頂からの展望は、妙義山、荒船山、立岩、遠くには浅間山。山頂は、岩場で狭いので、少し下った所で昼食にした。帰りは、来た道を通して下山をした。少し早かったので、大仁田ダムを見学して岐路についた。



途中の茂木売店に寄り、200円でこんにやく食べ放題を堪能して帰った。登りやすい山で、楽しい山行でした。(鶴田陽子)

【茅ヶ岳】

- 山行日：令和7年4月20日(日)
- 地 図：2万5千図「若神子」「茅ヶ岳」
- 行 程：深田記念公園一女岩一稜線一茅ヶ岳一防火帯道一深田記念公園・深田祭へ参加
- 参加者：石澤貴子、古屋寿隆、相川修、池田新二郎、磯野澄也、猪俣健之介、上田謙治、大澤純二、北原孝浩、東条真百合、服部俊樹、平松清子、手崎喜美子、黒木聖子、松村明子、山本かおる、坂井広志

令和7年4月20日、朝7時に茅ヶ岳登山口に集合。10分前に着いたが、大分下の駐車場に案内されるほどの人気ぶりに驚かされた。この登山口に立つのは30年ぶりだ。登山口では白鳳会のメンバーがところ狭しと駆け回り大活躍していて、目の合う知り合い、友人たちへの挨拶は楽しかった。

一度歩いた登山道や地形は覚える、という訓練を受けてきた自分であるが、歳をとったのか、歩いてみたら全く覚えがない。思わず北原先輩(前支部長)に「昔と比べて形状変化はありますか」と聞いてみる。「ほとんど変わらないね」と優しい声が返る。この会話をきっかけに、北原先輩の楽しいお話を聞きながら、また多くの先輩方との会話を楽しみながら歩くこととなった。女性たちは、スマレやツツジを見つける度に賑やかだ。深田先生の碑の前と、その直前の広い場所で、北原先輩の貴重かつ興味深い講義があり、山岳文化に触れる良い時間となった。前夜の支部懇親会で、堀口丈夫先輩が碑を背負い上げた時のお話をされたばかりだったので、碑を見たときには感慨深い気持ちになった。

50人以上がひしめく山頂で軽く昼食をとつ

た。山頂ではあちらこちらで終始笑顔や笑い声が絶えず、しばらく心地良い賑やかさを楽しんだ。全員で記念写真を撮り、下山の途につく。春の花を楽しみながら下山したのは13時過ぎだった。



深田祭会場の記念碑に寄った。碑には「百の頂に百の喜びあり」と記されている。たまたま先輩が「良い言葉だなあ!」と言って頷く。その時、今日の山頂や、これまで登った山頂での笑顔たちが走馬灯のように脳裏に浮かんだ。深田先生もたくさん見たであろう山頂の笑顔たちは、時代を超えて、今も、そこにある。

13時30分から深田祭が始まった。今日も良い登山ができましたと報告し手を合わせた。(猪俣健之介)

【西沢溪谷】

- 山行日：令和7年4月29日(火・祝日)
- 地 図：2万5千図「金峰山」
- 行 程：道の駅みとみ西沢溪谷入口広場一田部重治文学碑一二股吊り橋(東沢大橋)一西沢遊歩道一滝見橋一トロッコ軌道跡林道一ネトリ大橋一道の駅みとみ
- 参加者：相川修、渡辺峯雄、北原孝浩、小宮山千彰、大澤純二、小嶋数文、窪田光一、遠山若枝、大澤さな枝、村田幸子、渡辺秀子、坂井広志、神長幹雄、柏澄子

前夜の雨が標高の高い山々を白くしていた。朝方は濃霧だったか、8時の開式には青空となった。主催：山梨市観光協会・日下部警察署、後援：山梨日日新聞社・山梨放送・山梨県山岳連盟・日本山岳会山梨支部・山梨市により西沢溪谷山開きが開催された。安全祈願祭、田部祭、山岳指導所開所式の3つが併せて行われた。大嶽山那賀都神社宮司による神事では、今シーズンの登山者の安全を祈願するとともに、笛吹川源流域を世に広めた田部の功績が奏上、田部祭では、敬意と追悼を表して献花と山岳祭プロジェクトリーダー坂井広志による献酒が行われた。最後に登山道に張られた蔓に斧が振るわれる入剣の儀が行われ閉式となった。多くの登山者が紅白の安全祈願餅を受け取り山道へ向かった。碑前祭は、日本山岳会山梨支部の参加者のみで、田部重治文学碑の前で献花を行い記念写真を撮った。

青空に新緑が映え、心身を癒やされながら足を進めると、二俣吊り橋。雨の後だったが勢い良く

流れる水は澄んでいて綺麗だった。三重の滝のエメラルドグリーンを実際に見ることが出来て感激した。迫力ある溪流を楽しみながら沢岸でお昼を食べた。三重の滝、竜神の滝、恋糸の滝、貞泉の滝、不動の滝、数多くある中でも西沢溪谷最大の七ッ釜五段の滝は圧巻の美しさだった。帰路の旧森林軌道は、よくこの狭い道幅をトロッコで作業が出来たものだと感心する。

溪谷では、まだ桜が咲いていた。ミツバツツジ、ヒカゲツツジが見頃で、風はまだ冷たく、シャクナゲの大群落を楽しむには少し早かった。観光名所だが、滑落事故の多い危険な所という印象が強く不安だったが、経験豊富な先輩方の指導のおかげで安全に楽しむことが出来た。

山岳の楽しさを次の世代へつなげていきたい。
(村田幸子)

【須走立山～大洞山】

- 山行日：令和7年5月11日（日）
- 地 図：2万5千図「須走」「駿河小山」
- 行 程：道の駅須走（集合）—立山登山口—須走紅富台上—須走立山分岐点—立山展望台—立山—立山東分岐—畑尾山—立山東分岐—立山—須走立山分岐点—須走紅富台上—立山登山口

■参加者：白田昌美、北原孝浩

「群生の山芍薬が咲いているのを見る」を目的に当初6名の参加希望者がいたが、予定日の10日は天候に恵まれず、開花時期との兼ね合いで1日に順延したが2名での実施となった。

須走紅富台上（すばしりこうふだいうえ）からの富士山は新緑の木々を前景に碧空に映えて、スタート時点からずっと木々の梢の間に見えた。杉、桧の林の中を進み、陽が差し込む明るい場所にはサンショウバラの木が生えていた。樹相が徐々に紅葉樹に替わって、目指す山芍薬が一株、またあ

そこに一株という風に現れてきた。しばらく行くうちに、ドーンと群生している場所に至る。時間的に陽ざしが足りないのであろうか、花は付けてはいるが開き咲いている状況では無いようにも感じられた。

徐々に高度が上がり、山芍薬の群生が無くなって、ミツバツツジの大木が現れた。まだ五分咲ほどの状況。やがて、須走立山分岐点から立山展望台に向かう。下見の際には咲いていたという富士桜は散ってしまって、富士桜満開のトンネルを歩くことは叶わなかった。立山展望台では富士桜の花が数個咲いていた。



立山（1330m）は標示が無ければここが「立山」と分からぬ平らな林の中であった。畑尾山迄は新緑の林の中を下った。この先大洞山迄も富士桜が散ってしまって特段のこともないので、スタート地点に引き返すことになった。復路、群生の山芍薬は陽ざしの影響であろう、開花状態であった。

往路復路ともに整備された新緑の中の道を歩き、残雪の秀麗な富士山を見ながら群生の山芍薬の花を愛でる超短い山旅だった。（北原孝浩）

【上高地、野麦峠まつり】

- 山行日：令和7年5月24日（土）・25日（日）
- 地 図：2万5千図「上高地」「穂高岳」「梓湖」
- 行 程：文中に記載
- 参加者：平松清子、遠藤辰也、北原孝浩、岩間明子、荻野重行、村田幸子、福島繁美、保坂美佐子、八木秀子、村松明子

【1日目】

敷島総合文化会館を車3台にて4時30分発。中央道・長野道を経て、沢渡駐車場へ。タクシー3台にて上高地バスセンター着（途中大正池で写真撮影）。JAC山研に荷物デポ。梓川左岸、明神—徳沢—明神（穂高神社奥宮無料休憩所）—梓川右岸、遊歩道・岳沢湿原—山研。天気予報から絶望視していた西穂高岳の峰々～ジャンダルム～奥穂高岳～前穂高岳～明神岳の稜線は大正池からも、かっぱ橋からも見えてラッキーな第一日のスタートだった。



小梨平からは、道の両側はほぼすべてがニリンソウの群生と言っても過言ではない。この道私はつごう200回は歩いているはずなのにこのようにニリンソウのお花畑の記憶が全く無い。何故？ 穂高岳、槍ヶ岳や蝶ヶ岳・常念岳登山の往路復路でただただ歩くだけであったからであろう。何十万、否数百万のニリンソウの白い花の中に、白いはずの萼片が緑色に変異したものがみられること、また通常1つの花に6～7枚の萼片が10枚位に増えたものがあると、平松CLから聞かされていたので、一同瞳を凝らして探し、たまたま変異を見つけた際には目を輝かせてそれを皆で撮りまくる有様であった。

明神・徳沢の中間点で本降りになりそうで雨具を着た。徳沢のニリンソウは広々とした空間と榎などの大木との調和が見事であった。徳沢からは前穂高岳北尾根の一部が雨雲で見え隠れしてい

た。復路、明神からは明神橋を渡って、梓川右岸の遊歩道を進み、岳沢湿原を巡って山研に着いた。山研での夕食は皆の意向などから女性の方々が具たくさんのカレーライスとサラダを料理してください。とても美味であった。夕食後にはビールやワインで気分高揚、会話が弾んだ。

【2日目】

女性の方々が4時起床で朝食の準備してください。雨中5時45分山研を出発、バスセンターから沢渡までタクシーで移動する。車で「第43回野麦峠まつり」に参加するため野麦峠へ。参加費一人1000円（貸衣装代、食事代込み）。

「野麦峠まつり」は明治・大正から昭和初期にかけて日本の富国強兵策ため外貨稼ぎの主力輸出産業の生糸工業に従事した多くの工女たちの哀史を偲びながら麦草峠歩きをする行事である。降雨



のため野麦峠まつりは規模縮小され、開始時間繰り下げなどして実施されたが、われわれは往時を偲ぶ衣装に着替えて、まつりに参加した。

高山市の田中明市長

から、遠方の山梨県から大勢がまつりに参加したことに感謝された。まつり終了後、長野県道29号・26号（ともに野麦街道）を奈川渡ダムまで戻り、国道158号線（野麦街道）を経て往路の長野道・中央道を走って帰路についた。

なお、野麦峠に関する思いを、「トピックス」欄に掲載した。（北原孝浩）

【登山・ハイキングのためのロープワークとセルフレスキュー技術講習会】

- 山行日：2025年6月8日（日）
- 地 区：2万5千区「甲府北部」
- 場 所：緑が丘スポーツ公園
- 参加者：古屋寿隆、中田雅弘、猪俣健之介、遠藤辰也、相川修、石澤貴子、手崎喜美子、町田千絵、富田薫、木村祐介、大塚裕己、小澤拓、近藤貞純、市川俊幸、大原光彦、三井教年

この講習会に参加するのは3回目だ。すでに基本の8の字（フィギュアエイト・ノット）オン・ア・バイトとフォロースルーに関しては完璧。クローブ・ヒッチ、ムンター・ヒッチも両手を使って良ければ完璧。カラビナに左手のみで出来るか？ときかされると、首をかしげるレベルだ。登山中に必要になった場合、落ちていて対応できるか、同行者と同じ技術をその場で共有できるか。知識、技術、経験の有無はそれぞれだ。ハイキングといえども、自然が相手の山の中では何が起こるか分からない。自分の山行を振り返ると、重大な危険

にこそ出くわしてはいないが、スリングとカラビナとツェルトを持参して良かったという経験がある。日々の繰り返しの練習が大事だと思った。

今回は私より初心者の方に、ほんの少し教えてあげることができた。毎年教わる技術が増え、伝えられることも増えていくことを実感している。

知識と経験技術豊富な古屋支部長にして、今回の講習会の資料を何回も作り直し、事前に講習会

を開くという念の入れよう。私の知る限り、資料は過去同じものを使っていない。毎回ブラッシュアップしている。他支部の参加者からは「充



実の企画をありがとうございました」というお礼のメールが届いていた。安全登山を心がける真面目な登山者の集まりだったと思う。参加者16人（内山梨支部員外9名）という大所帯では、時間がタイトであり話もできず残念だった。

全国組織の日本山岳会のメリットを考えると、これからは、ご参加の他支部の方々との情報交換、山の話なども楽しみたいと思った。（石澤貴子）

トピックス

第44回深田祭・深田記念支部登山に参加 ー深田氏の功績に想いを馳せるー

第44回深田祭恒例の山梨支部記念茅ヶ岳登山に今年も参加した。

深田公園を8時に16名でスタートした。女岩までの登山道沿いの花々は例年に比し開花がかなり遅いように感じられた。ダンコウバイとチョウジサクラが楚々と咲いていた。傾斜のあるジグザクを繰り返して稜線に出た。石澤貴子CLから、「深田さんの慰霊碑の所で、昨年のように話をしてください」と依頼があり、今年は少し詳細に説明した。説明概要は次の通り。

「深田久弥氏は1971年（昭和46年）3月21日にここでお亡くなりになった。前夜は韮崎市の穴山温泉の能見荘に泊まり、翌3月21日朝に茅ヶ岳登山を開始した。一行は男性6人、女性1人。男性6人は全員JAC会員で、山村正光だけが山梨支部員、他の5人は本部会員（一橋大学山岳部OB）だった。女性については残念ながら不詳。深田氏が倒れ、山村は救援要請のために急遽下山し、医師を連れて戻ったが、その甲斐なく深田氏は既に逝去されていた。深田氏を山麓まで搬出する作業は非常に大変だった。遺体搬出には急遽呼び出された山梨支部員2名も応援に駆け付け

た。現在深田久弥氏終焉のこの場所には朽ちかけた木製の慰霊碑と石の慰霊碑が建っている。木製の慰霊碑は1980年(昭和55年)3月21日に設置したものである。当日は雪が降り、中央線が不通、山麓に前泊したJAC本部の坂倉登喜子(エーデルワイス・クラブ創設者)、JAC三水会の高田眞哉、斎藤健治、廣羽某、滑志田隆(東京都在住、現山梨支部)、山梨支部山村正光と深田会の数名が雪降りしきる中(積雪60cm)、木製碑を建てた。その後木の碑が傾き朽ちてきたので、山村正光は石碑に建て替えようと考えた。1997年(平成9年)11月30日に石碑(40kg)、ツルハシ・セメント・砂利・砂・水などを山村正光、石垣正雄、山本稔、堀口丈夫(いずれも山梨支部員、堀口丈夫以外は既に鬼籍)の4名で背負い現在地に建てた」



茅ヶ岳山頂で昼食、全員で記念撮影後、深田祭記念式典の行われる深田公園に下山した。

第44回深田祭記念式典では、主催者挨拶に続き、来賓の紹介が行われた。来賓を代表して坂井広志前JAC副会長(現「引き継がれる山岳祭」プロジェクトリーダー)が3年連続して挨拶をされた。挨拶は過去2回には各山岳祭についての紹介やJAC山岳祭プロジェクトチームの取り組み概況が中心であったと記憶している。今年は「引き継ごう山岳祭2025年版」のチラシを掲げて、JACの取り組んでいる山岳祭の中身に触れられ、「JACは当該山岳祭の人物顕彰が中心である」ことを、3度も強調されて述べられた。行政が観光振興中心に行う山岳祭とは異なることを、つまり一線を画していることを強調されていた。

また、支部員数名に深田氏の功績、顕彰すべきことがらについて尋ねたところ「日本百名山を決め本を出版したから」というようなことであった。山岳人として次のことを知ってほしいと考えたので記しておきたい。

私が所属するJAC同好会麗山会においてのことではあるが、2006年暮れに深田久弥氏と親しく、生前を最もよく知る最後の人と言われている山本健一郎氏(JAC会員、一橋大学山岳部OB、2007年没)から、「自分は余命数か月の身であるが、深田久弥氏のことを是非多くの会員にお話したい」という話があった。そこで麗山会は2007年1月24日に東京芝のNEC倶楽部での新年会

で山本健一郎氏に深田久弥氏の話をしていただいた。(参加者:麗山会27名、会員外4名)。話の要旨は次の通り。

「深田久弥は、作家、登山家として日本百名山を記したことで一般に有名であるが、ヒマラヤや中央アジアの文化・探検史の研究者でもあった。各大学の中央アジア・西域の研究者や山岳部や探検部の方々や街の山岳会の人たちも、ヒマラヤや中央アジア方面への遠征、学術調査や探検に際しては、情報や地図などの資料を求めて深田さんのご自宅に大勢来られていた。それに対して彼は懇切に対応されて、地図や資料などを惜しみなく出していたその並々ならぬ姿を伝えたい。大勢の遠征隊や岳実調査隊が深田邸から巣立っていったと言っても過言ではない。日本山岳会にも沢山の資料などを没後にも寄贈されている。深田さんは堀辰雄や井伏鱒二といった作家と親交があったが、鎌倉から金沢へ転居してからは一層山の方に目を向けて、日本百名山を書くようになった。あと数座を残すくらいになった際に、選びたい山は数多く残っているし、どれを落とすかについて悩み苦しんでいる姿を目の当たりにした。また、亡くなられたあの3月21日の茅ヶ岳の登山には私も誘われていたが、仕事の都合で一緒できず、今でも悔やんでも悔やみきれない」

私の自宅からは茅ヶ岳が見える。そして深田祭恒例の支部茅ヶ岳登山、支部の「やまなし登山基礎講座」で受講生と一緒に登った茅ヶ岳、友人と登る茅ヶ岳。茅ヶ岳を見たり登ったりする際に、深田久弥氏が登山界に計り知れぬ大きな功績を残されたことにいつも想いを馳せている。(北原孝浩)

第8回田部祭と支部による碑前祭

4月29日(昭和の日)、昨夜からの雨も上がり木賊山から破風、雁坂への尾根筋がうっすらと白く輝き取り巻く新緑が一層まばゆい中、溪谷入り口バス停先の広場で、第8回田部祭が西沢溪谷開山祭・山岳指導所開所式と併せて開催された。今年は式典開始時間が、8時半と少し早めのせいか会場への参加者は三々五々の集まりだったが、1つの間にか会場の周りには人垣が作られていた。

来賓席にはJAC本部から坂井広志氏、山梨支部から古屋支部長、石澤さんが参列し、式辞の中で秩父山塊での田部重治の功績が披露された。式典はいつも通り、登山道を切り開く入剣の儀で終了し登山者は配られた紅白の鶴の子餅を手に溪谷の奥へと向かった。

我々山梨支部員28名は、この後西沢山荘前の

田部重治文学碑前に場所を移し、改めて秩父山塊を世に広めた田部の功績への敬意と追悼を田部祭として執り行った。碑前祭では、古屋支部長の開辞の後、本部から出席いただいた坂本広志「引き継がれる山岳祭」プロジェクトリーダー、神長幹雄様、柏澄子様から自己紹介を頂き、村田幸子支部員が碑前に献花した後、当支部小宮山千彰氏が碑に刻まれた「笛吹川を遡る」の一節の説明と田部重治の功績を解説した。



話の中で小宮山氏のご親戚の宿に田部等が宿泊された記録がある事がエピソードとして語られ、田部重治が一層身近な存在になったような気がした。青空と新緑の落葉松林、溪谷のかすかな流れの音。広場での田部祭とは趣を異にした碑前祭であり、田部重治によく似合ったひと時であったように感じた。この後、全員で集合写真に納り、恒例の溪谷周遊へと向かった。(渡辺峯雄)

野麦峠をめぐる思い 一野麦峠まつりに参加して一

野麦峠は飛騨と信濃の国境である。江戸幕府は飛騨高山に代官所を置き天領とした。飛騨高山～信濃松本間の野麦街道は奈良時代から官道として交易の重要道路であった(信濃からは米、清酒などが飛騨へ、飛騨からは飛騨鱒・塩・海産物が信濃へ、また飛騨の代官が江戸城へ行く道に指定された古い街道であった。お助け小屋は江戸時代幕府が認可したもので、糸引き工女も利用した)。飛騨からの工女の大半はこの道を経て松本へ、そして塩尻峠を越えて岡谷や諏訪方面の製糸工場に向かった。

1872年(明治5年)、明治政府は富岡製糸場(一部国宝、世界遺産)を造った。一方岡谷・諏訪地方を中心に長野県には最盛期に623の製糸工場があったが、こちらは全てが民間の工場であった。工女の出身地は地元長野県をはじめ、岐阜県、富山県、新潟県、群馬県、山梨県、愛知県などで、岡谷方面へ工女が通過する和田峠や塩尻峠、八ヶ岳山麓や天竜峡などで工女争奪の山賊が出たとの記録がある。それほど多くの工女がこの地域に出稼ぎに来ていた。

映画の「ああ野麦峠」は、同名のノンフィクション小説の中で記述された工女みねの悲しい実話であり、野麦峠にある銅像もこの工女みねと、病

に倒れたみねを越中との県境に近い村から引き取りに来た兄の政井辰次郎である。この映画は一人の女工哀史が中心である。今回「野麦峠まつり」に参加して、熱湯と蒸気、悪臭、騒音の工場での立ち姿の労働環境のことや、暮れに故郷に帰る際に、素わらじに紺のももひき姿で雪の山道を歩き峠越えしたことなど、昔読んだ本の記述等を思い出した。近代化に突き進んだ日本の歴史の影には暗澹たる部分があったことを決して忘れてはならぬと、今更ながら思った。(北原孝浩)

理事会報告

4月17日

定時総会議案、公募・支部山行の令和6年度実績と7年度計画、山岳古道調査に関する全体会と分科会、新入会員向け親睦登山及び説明会・意見交換会

4月19日【定時総会】

令和6年度事業報告、令和6年度収支決算報告・監査報告、令和7年度事業計画、令和7年度収支決算、登山届提出の手順等

5月14日

公募・支部山行の実績と予定、公募・支部山行等の通達・マニュアル・規程等の見直し、新入支部員対象ハイキング・登山届け説明会・意見交換会、支部通信18号の発行、子どもと登山計画案、山岳古道調査の進捗

6月11日

公募・支部山行の実績と予定、子どもと登山の詳細、山行委員会事務局の人事、山岳古道調査の進捗、引き継がれる山岳祭の進捗、支部通信・機関誌の編集方法等

編集後記

日本山岳会創立120周年の今年、記念事業の詰めの作業が続いています。昨年度は支部主催の複数のイベントに注力しました。その精力を、今年度は120周年事業に向けていきます。支部員各位のご協力をお願いいたします。

今号は特に、個性的で味わい深い紀行や論考が寄せられ、誌面を豊かにしていただきました。書くことも登山の一部です。積極的な寄稿を、多くの支部員にお願いする次第です。

編集 矢崎茂男(広報委員)

住所: 408-0114

山梨県北杜市須玉町藤田 502

TEL: 090-7734-2788

Eメール: yazaki-s@taupe.plala.or.jp